

『キリストの光のもとへ』詩篇84：10-12

84:10 あなたの大庭にいる一日は、よそにいる千日にもまさるのです。わたしは悪の天幕にいるよりは、むしろ、わが神の家の門守となることを願います。

84:11 主なる神は日です、盾です。主は恵みと誉とを与え、直く歩む者に良い物を拒まれることはありません。

84:12 万軍の主よ、あなたに信頼する人はさいわいです。

●序論

たとえば、正面にあるようなクリスマスツリーやオーナメント、飾りつけの物一つ一つをとっても、それが歴史の中で異教的な風習で用いられてきたものを取り込んで、意味づけし、今やだれもがクリスマスツリーは、キリスト教のクリスマスの代表的な飾りつけとお言うオリジナリティを主張できるほどになっています。

クリスマスの起源で解説されていることですが、

紀元三世紀までのキリスト教徒は、12月25日をクリスマスとして祝っていなかった。キリスト教徒は、四世紀の初頭まで、のちのキリスト教会の重要な祝日となるこの日に、集まって礼拝をささげることもなく、キリストの誕生を話題にすることすらなく、他の日となんの変りもなく静かに過ごしていたということです。

実際、当時の人々は振り返って、その降誕日を割り出そうとする試みはしていますが、実際にはわからない…ということを受け入れたうえで、ある日をその日として定めるようになってきた。それが当時異教の太陽崇拝の特別な祝祭日であった12月25日だったということです。

では、そんないかがわしい日だから、意味がないというのではありません。今やそういう認識は、みじんもなく、わたしたちクリスチャンはこの待降節、クリスマスに思いを向けることができるようになっていきます。先ほどの本にはこうあります。

キリストの誕生を祝う動機は、（人の救いのために）神がイエス・キリストにおいて人なり、私たちのために降臨なさったという事実…に由来します。

ヨハネ3:16 神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。

この神さまの愛の証の発現に、わたしたちは目を向ける特別な機会を、祝う特別な時を、そして、今も変わらないその愛を経験する時を与えられている、それがこの待降節に始まるクリスマスの期間です。

●本論

I. ここに礼拝への飢え渇きがある

この詩篇84篇の始まりにはこうあります。

84:1-2 万軍の主よ、あなたのすまいはいかに麗しいことでしょう。 わが魂は絶えいるばかりに主の大庭を慕い、わが心とわが身は生ける神にむかって喜び歌います。

神の宮で礼拝すること、神さまと出会うこと、恵みを味わうことへの飢え渇きです。

84:3-4 すずめがすみかを得、つばめがそのひなをいれる巢を得るように、万軍の主、わが王、わが神よ、あなたの祭壇のかたわらに わがすまいを得させてください。 あなたの家に住み、常にあなたをほめたたえる人はさいわいです

LB) 雀やつばめでさえ、祭壇のまわりに巢を作らせてもらい、ひなを育てています。

そんな礼拝へのあこがれを、礼拝することのできる宮のそばにあることへのあこがれを、飢え渇きを、どれほどわたしたちは持っているのでしょうか？

今週まで、週報に世界の迫害下にある教会のための祈りのリクエストを掲載してきました。 今も、さまざまな国で、教会が焼かれ、クリスチャンの方々が迫害を受けています。 そんな中で、彼らは、主の宮につどうこと、神への飢え渇きを止められないでいて、そして事実そういう国々でクリスチャンは爆発的に増え広がっているのです。

そこに神さまの答えがある…、飢え渇きへの神さまの答えがある、そう思わないではられません。

そういう飢え渇きを、詩篇の作者は、こう歌っています。

(新改訳) 84:10 まことに、あなたの大庭にいる一日は千日にまします。
私は悪の天幕に住むよりはむしろ神の宮の門口に立ちたいのです。

Ⅱ. ここに神信頼の告白がある

(新改訳) 84:11 まことに、神なる【主】は太陽です。盾です。【主】は恵みと栄光を授け、正しく歩く者たちに、良いものを拒まれません。

そう、「主はわれらの太陽」という賛美です。

だれもがわかる「主なる神さまは、太陽のようなお方だと」、その歌詞に、メロディに国を超えて一つのなれた礼拝経験がそこにあったのです。

しかし、この旧約聖書の中で、神さまのことを、すなわち「太陽」と表現するところはほかにありません。

その理由は、当時の周囲の異教の中に広く浸透していた「太陽神礼拝」と混同されることを避けたのだろうということです。

そのことをわかった上で、今日の箇所は、とてもわたしたちにとって、大切な神信頼の告白となっているのです。

84:11 まことに、神なる【主】は太陽です。盾です。【主】は恵みと栄光を

授け、正しく歩く者たちに、良いものを拒まれません。

わたしたちの経験は、この方が、わたしたちがどんなものであっても、これまでどんな影と汚れた道を歩む者であったとしても、立ち帰って頼るならば、「恵みを栄光を授け、正しく（主に目を向けて）歩む者たちに、良いものを拒まれません」と告白できるのです。

あらためて、この信仰の告白と賛美が、わたしたちの心に注ぎ込まれるところ、その豊かな祝福に浸される経験、それこそが神の宮の経験、礼拝の経験であるのです。

ですから、最後の告白に目を留めましょう。

Ⅲ. ここに信頼する者の幸いがある

84:12 万軍の主よ、あなたに信頼する人はさいわいです。

たとえば、友情も、また夫婦生活でも、相手を信頼すればこそ、相手との間に安心と喜びを共有することができます。

かつて、イエスさまはわたしたちを友と呼んでくださいました。

わたしはもう、あなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人のしていることを知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼んだ。わたしの父から聞いたことを皆、あなたがたに知らせたからである。（ヨハネ15:15）

また、聖書は夫婦の関係に向けて、キリストと教会の関係を重ねてお話になりました。

夫たる者よ。キリストが教会を愛してそのためにご自身をささげられたように、妻を愛しなさい。（エペソ5:25）

わたしたちが、そういうイエス・キリストとの信頼によって築き上げられる関係を通して与えられるものが、「幸い」なのです。

このことを、ある説教者はこう語ります。

- ・「信仰の喜び」とは、この詩人を通して示されるように、個人的・人格的に神を体験して生きることである。…まさに「礼拝経験」です。
- ・「人生の価値」は、時計で計れるような客観的な長さによって決まるのではない。わたしたちにとって創造主なる主の臨在をどのような思いで、どのような仕方、どのように経験したかによるのである。…これも「礼拝経験」です。

そしてこう語ります。

この神体験の深さは、客観的な人生の長さよりも大切に思われる。わたしたちもまた、神と共にある一日を、神との出会いなくして過ごす千日よりも貴いと思う。…これが、礼拝の経験の証です。

この詩篇の作者は、「信頼する人の幸い」を礼拝の中で見い出しているのです。

84:12 万軍の主（すべての権能を持つ方）よ、あなたに信頼する人はさいわいです。

●さいごに

この詩篇の作者は、神の宮へのあこがれを歌にすることを歌い始めとしていました。しかし、次第に、そこでの礼拝を通して得られる神さまの臨在経験そのもの、その礼拝の本質で出会う神さまの愛と恵みの豊かな喜びを歌い上げています。

84:12 万軍の主よ、あなたに信頼する人はさいわいです。

実は、それが新約につながるイエス・キリスト体験、礼拝経験となっています。

:14 そして言は肉体（人）となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまこととに満ちていた。

「私たちはその栄光を見た」とヨハネは証言しています。

それは歴史上の事実としての体験を証言していると同時に、その恵みとまことのありさまを示し、私たちを招き寄せているのです。

この待降節とクリスマスに、わたしたちの目は何を見たいと願っているでしょうか。また何を経験したいと願っているでしょうか。

イエス・キリストの誕生そのものは、すなわちキリストの十字架と復活のクライマックスへと向かいます。そのことを知らずしてクリスマスの喜びは語れません。クリスマスは、わたしたちのためにいのちをも捨てて、わたしたちの罪を赦し、救いを成し遂げられた、神のひとり子イエス・キリストのご降誕だからです。

「キリストの光のもとへ」と題し、「主はわれらの太陽」とも見てきました。

この言葉のすべては、わたしたちを、神さま経験への礼拝へ招く言葉となっているのです。イエスさまこそ、

1:9 すべての人を照すまことの光があって、世にきた。

とある、「光」そのものだからです。